

高等教育の国際化—アジアと日本



放送大学副学長
二宮 皓

アジア諸国の多くは、留学生の送りだし国として多数の留学生を、アメリカ、イギリス、オーストラリア、ドイツ、フランス、そして日本に派遣してきている。欧米諸国や日本はODA政策の一環としてアジアからの留学生を受け入れ、優れた人材に育成し、時には「頭脳流出」も起こっていた。

しかしアジアの経済発展とともにアジア域内の大学間交流への関心が増大し、日本に次いで韓国や中国がアジアからの留学生受け入れ政策を展開し、タイでも大メコン地域大学間交流を主導してきた。やがてアセアンとして大学間交流のための仕組みが開発され、アセアン大学ネットワーク（AUN）が組織され、域内大学間交流の本格的な展開が期待されるようになってきている。マレーシアもイスラム高等教育を核とする留学生受け入れ国として活発な政策を展開しているが、シンガポールはさらにMITと連携し、シンガポール国内においてインドなどアジアからの留学生を受け入れ、MITとの連携型教育サービスを提供している。まさにこれはWTOが協議してきた高等教育サービスの国境を超える提供であり、貿易可能な高等教育サービスの一つの典型的な姿を示すものである。シンガポールは高等教育さえも自由貿易の対象としているともいえる。

アジア太平洋大学間交流機構（UMAP）も、それまでのオーストラリアの主導の域を脱して、日本やタイのリーダーシップのもとに今やアジアの大学が主流となり、高度な大学間交流のスキームを開発し、展開している。

さらに2011年にはアジア版エラスムスとでもいうべき「キャンパスアジア」（日本の世界展開力事業）がスタートし、日中韓3カ国の大学がコンソーシアムを組織し、東アジア共同体構想とでもいうべき大学間交流スキームの開発を行う（5カ年計画）。この成功は間違いなくアセアン+3のアジア域内交流スキームへと発展することに違いない。

本特集ではこうした目覚ましいアジアの高等教育の国際的展開に焦点をあて、アジアの大学の国際化の動向と特色を日本を軸としながら論議する。